

ひょうたん島通信

大槌発! 第18回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

大震災3年目を迎えて

大竹 二雄

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 教授・センター長

さる1月12日に大槌町城山中央公民館で大槌町成人式が開催され、私も来賓の一人として参列する機会を得ました。新成人の多くは、震災時に避難所となった大槌高校で被災者の世話を当たった大槌高校の生徒だった人たちです。大槌高校の避難所で4日間を過ごした私には、高校生たちと一緒に味噌汁の鍋を運んだり、水の冷たさに手を真っ赤にしながらい洗いをしたりしたことなどが昨日のこのように思い出されるとともに、避難所における彼らの献身的な働きぶりをみて、この若者たちが担う大槌町の未来に大きな希望を感じたことなどとても懐かしく思い出されました。「光陰矢のごとし」といいますが、早いもので大震災から3年目を迎えています。大槌町にもようやくそこかしこで重機が動き始め、復興の槌音が聞こえるようになってきました。まだ町の形は見えてきませんが、一日も早い復興を願うばかりです。

さて、震災で壊滅的な被害を蒙った国際沿岸海洋研究センター（沿岸センター）は大槌町の赤浜地区内の盛土・造成する住宅予定地に隣接した場所に移転する方向で計画中です。移転場所は、まず

大槌町が取得した後に東大の敷地と等積交換される予定で、現在、大槌町による用地買収が進められているところです。新しい沿岸センターの研究棟や宿泊棟については、昨年

2013年に大気海洋研究所内に組織された渡邊良朗教授を委員長とする建設ワーキンググループで基本設計が作成されました。復興のシンボルとなるような斬新な、そして赤浜地区の風景に溶け込むようなデザインの建物が計画されています。

沿岸センターは共同利用・共同研究拠点の研究施設として、また文部科学省「東北マリンサイエンス拠点形成事業」の拠点として、震災後も全国の多くの研究者に利用されています。2013年度は12月末現在で延べ1,500人日の研究者に利用していただきました。沿岸センターではこれまでも被災した研究棟の3階を整備して使用してきましたが、これをさらに改修・整備して、活発化する研究活

大槌町町方の風景（2014年1月）。



動に備えているところです。しかし、宿泊施設がないことなどまだまだ沿岸センター所属の教員・学生や共同利用研究者に不便をかけているのが現状です。

赤浜地区の方々からも一日も早い復興を願う声がしきりに聞かれます。沿岸センターの復興が赤浜地区の復興の加速剤として、大槌町の復興のシンボルとして、期待されていることを感じずにはられません。2011年6月30日付け岩手日報に掲載された「沿岸センターは蓬莱島とともに地域の宝」という赤浜地区の方の言葉に大いに勇気づけられましたが、地域に支えられながらここまで来たという感がしています。一日も早く沿岸センター復興が実現できるよう努力していきます。

ぴーちゃん日記

新沿岸センター研究棟完成が遅れる!?

岩手県が平成25年12月末に更新した復旧・復興工事の工程表によると、大槌町全体の防集（防災集団移転促進事業）団地や公営住宅などの整備計画が、半年から、場所によっては1年以上遅れることが分かりました。また、水門・防潮堤の完成時期も、1年ずれて平成28年度末になりました。

沿岸センターのある赤浜地区の公営住宅完成時期も、「平成27年度半ば」から「平成28年度後半」へと1年以上遅れる

とのことでした。町によると、下水道工事等他の復興事業との調整や、用地の契約手続き、作業員や資材確保が思うようにはいかないこと等が遅れの原因とのこと。この動きは、当然沿岸センター研究棟新設と無関係ではなく、同様に新研究棟完成が遅れることを意味しています。未だに造成予定地の樹木の伐採もされず、造成工事が開始されない現状を見ると、あと何年間、被災した現沿岸センターに留まらなければならないのか、と落ち

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。5年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災で再び岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から東大に戻ってきました。

んでしまいます。

「3.11」。あの日からもうすぐ3年です……。



沿岸センター建設予定地（2014年1月）。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）